

巻頭言

本学のスクールアイデンティティの 創造へ向けて

明倫短期大学学長
下河辺 宏 功



明倫歯科保健技工学雑誌は、1997年度の創刊号以来八年目を迎え、明倫短期大学創設とともに歩み本学の歴史を刻んできた。本年は末広がりのめでたい年にあたる。近年、明倫短期大学の名は、歯科技工士、歯科衛生士および言語聴覚士の養成校として全国に浸透しつつあり、今、本学の真価が問われている。

先に文部科学省は、2009年に全入時代が到来すると予測していたが、本年、受験生の動向から2年前倒しして2007年に修正した。試練の時が目前に迫っている。この難局にあたり大学が生き残るために何をなすべきか。この問題について関係各機関において盛んに議論が展開され、特色ある教育、魅力ある大学の模索がなされている。しかし、大学の特色や魅力はその歴史や伝統のなかで醸成されるものであって、一朝一夕に成るものではない。

然らば、特色ある大学、魅力ある大学にするにはどうすればよいか。解決策は教職員自身にある。常日頃の教職員の教育に対する姿勢こそが肝要である。即ち、本学の創設者、故木暮山人氏の建学の精神—人格の陶冶、新しい知識・技術の修得、社会への医療技能の還元—を念頭に置き、真に教育の何たるかを自ら問い、己の資質の向上を図り、学生教育に心血を注ぐことである。そして教職員学生相互の信頼関係を樹立することである。これ以外に王道はない。教育は片手間で出来るものではない。学生は教員の心を一瞬にして察知する。また、教員の一举手、一投足、一言が、学生の一生を左右する力を持っていることを忘れてはならない。教育の恐ろしさを心すべきである。この様な教職員の真摯な姿勢が伝承されて大学の特色や魅力の創造の原動力となっていくのである。これが教職員・学生のスクールアイデンティティへと発展し、学生を惹きつける。よい教育こそが学生を呼ぶのである。本学の卒業生達が、ここで学んでよかったと心から思えるような、そんな明倫短期大学としなければならない。

全私学新聞（H13. 11/13）に宮崎女子大学教授、宗和太郎氏の興味深い記事が載っていた。多々共鳴する点があるので、此处に一部を紹介しておく—「脱皮出来ないヘビは死ぬ」と前置きし、「教員中心・研究中心から学生中心・教育中心へ脱皮し体質改善を図る・・・」

本学とともに後1年余りで十年目を迎える本誌も、この大切な役割の一端を担うべき存在として、その責務はいよいよ重大である。そろそろ創設期から脱し、編集方針、装丁等衣替えを考えては如何なものか。

平成16年11月30日 記